

その他

マニラの残照

東京都 岡田梅子

崖下の落水で飯盒を洗っている時だった。装具をつけた二人の兵隊さんがやって来て、「君、看護婦さんかい」と声をかけた。私はハッとして「新米の」と答えると「戦争が済んだの知ってるかい」と聞く。私は自分の耳を疑った。「はあ」と聞き直したが、兵隊さんはカイロ灰のような太くて大きい手製の煙草に火をつけながら「早く山から出た方がいいよ」といい残して南へ行ってしまった。私は急に心が落ち着かなくなり、その真偽を一刻も早く確かめたくて洗い物もそこそこ

に早速隊長の所に飛んで行き、兵隊さんの言い残した言葉を口にした。すると、「馬鹿」と一喝された。私はすぐごと引き返し、皆に口止めはしながらもついついささやいていた。

それは昭和二十年八月三十日の出来事だった。

その夜、私は隊長に呼ばれ、「戦争は済んだようだ。ここで少ししゃべって行きなさい」といわれた。兵隊さんたちは上官の前ではいつも遠慮がちで、あまりしゃべる者はいない。隊長は樺太と朝鮮、台湾を放棄して休戦を承諾したらしいといっていた。私はその話を聞き、思わず噴き出してしまった。げげんな顔の中間に向かつて、私は「両手、両足を切らす条件で命だけは助けてやろうといわれた時、誰がオメオメ切らして命請いをしますかしら」といった。「そうだ。そう

だ」という兵隊さんもいた。隊長も「お前の言うことにも一理あるな」と悲痛な顔で考え込んでいた。

私はそれから、樺太、朝鮮、台湾の占める国防上の重要な地位やら重要産物を列挙して新たに日本の領土となるジャワ、スマトラ、ボルネオ、インドネシア、小スンダ列島の足がかりを考えるとますます台湾の地理的重要さが加わるといい、どうもフィリピンは取り損なつたらしいと独りしゃべりまくった。

三軒家には朝鮮の人が多かった。彼女たちは非常に団結心が強く、体格もよく、その上ファイターそろいで、使役の時などの馬力は全くものすごく、感心させられた。私はよく彼女たちの話に加わり、お嫁に行く時の習慣や、その家々自慢の漬け物の話などを聞き取っていた。

念のため、その夜も朝鮮の彼女たちの所に様子を见に行った。以前から時折顔を見せていた金さんというやはり朝鮮の人が遊びに来ており、異常に興奮して夜更けまで歌ったり騒いだり、ドンチャン騒ぎをしていた。

ああ、戦いはついに終わった。私は一体何のためにここまでやってきたのか。何のためにこの苦勞を続けて来たのか。理由なくしてこの戦いに巻き込まれ、ここまで追いやられ、そして初めてすべてが終わったとは。だが、不思議に私の心には戦いに負けた怒りは起こらなかった。そして、これから先、果たして逆に順序をたどって行けば、再び人間としての生活に立ち戻ることが出来るのだろうか。飽くことを知らない生への執着に、私の心はやるのだった。

「なでしこ隊」はこれまで来た道を逆に南下し始めたが、食糧不足ははなはだしかった。朝鮮の人でお人好しのノッポさんは、行軍中に突然大声でわめき出し、道端にうずまっまっているうちにパタッと泣き止み、と同時に死んでしまった。死因は心臓麻痺らしい。森の中では、海軍の軍属の服装をした浅黒い顔のインドネシアの青年が、今しも息が絶えるところだった。

田坂大尉のいた山の麓の「なでしこ隊」の隊員はその後、移動して川のはとりの林の中に草で造った三角の小屋に住んでいた。三つ四つと小屋をのぞいて歩き、

久し振りの再会を喜び、あれ以後、死んでいった人たちの話を聞いた。岡本さんもその小屋に寝たきりになっていた。喜怒哀楽の情も忘れてしまったように見えるほど、すっかり弱り果てていた。かねて占つてもらったお告げの通りにした岡本さんと浜さんは、南下して行く途中の道で、投降を防ぐ番兵に追い帰されたとのことであつた。

「浜さんは」

私は岡本さんにたずねた。

一時も早く彼女に会いたくて私は、「洗濯に行つてゐる」という返事もどかしく外に飛び出した。そして走りながら、ああ、無事でよかつた。と心の底から喜んだ。転ぶようにして川に行くと、すでに人影はなく、黄昏時の景色はちょうど墨絵のように美しかった。視線を岸の岩に沿って追つて行くと、小猿のように膝頭を抱え、しゃがみ込んでゐる人がいた。それは間違ひなく浜さんだつた。走り寄ると、彼女は私を見るなり、声も出さずにただニタリと笑つた。私はギョッとした。どす黒い顔はやせて眼ばかり大きく、しかも腫

の位置が前とは違うように思えた。彼女の脇には洗ひ終わったズボンが置かれ、精も根も尽き果てたようにガツクリしてゐたところだつたのだ。私は再び会えた感激に、彼女の手を取り、涙にむせびながら抱きかかえるようにして小屋に連れ戻したのだが、彼女はその間、終始放心状態で何をいつても小さなしわがれ声で、私には聞きとることはできなかった。

その夜はそこで過ごした。

そして翌日、「足に自信のある者だけは、隊を組んで出発、病人は担架輸送を待て」との命令が出た。ここにいた人たちはひどい食糧難のため、元気な人はわずかであつた。その元気な人たちも、皆人が違つたようにやせていた。出発の時、私は岡本さんと浜さんにくれぐれも担架輸送をしてもらうようにいい残して寂しく別れた。だが、いつまでに運ばれるということもわからず、全然食物のない地に置かれることは患者たちにとって不安の上もなかつたに違ひない。そのせいか、とても独り歩きは無理だと思われれる人たちまでが、装具をまとめて出発するのだった。

ちょうど昼ごろだったか、気持ちのよさそうな河原に着いた。河原の石も温まっており、皆一様に腰を据え、いつまで経っても動く気持ちが起こらず、とうとう野営ということになった。そこで念入りにテントを張って、洗濯したり疥癬の治療をし合って、のんびり一夜を過ごした。

その間にようやく追いついて来た人もかなりいた。その一人から、私はまたとない悲しい知らせを聞かなければならなかった。その人は特に名前はいわなかったが、私にはそれが浜さんのことだと直感した。その話によると、浜さんはその人たちと一緒に小屋を出たが、始めから休みがちだった。そして、出発してから二時間足らずで二度と立ち上がれなくなり、道端でついに息を引き取ったということだった。

かわいそうな彼女、私は彼女のあの最後の笑い顔を忘れることが出来ない。

そこからもなお露営の幾夜かを重ねたが、まだまだ山は深かった。そんなある日伝令の通達があつて、私たちは珍しく整列させられた。山沿いの細い道で、思

い出多い「なでしこ隊」の解散式を行ったのである。これからは何を頼っていったらよいのか。二人、三人ずつの固まりが列から離れて行く。隊長は泣き出しそのような顔をしながらいつまでもいつまでもそれを見送っていた。

私もこの中年の中尉に対して、おそらくこれが最後であるう拳手の礼をし、別れて行った。こうして「なでしこ隊」は完全に消滅した。

松本さんとたどり着いた現地民のニッパハウスの家には「なでしこ隊」の者も二、三人いた。新聞記者だという人もおり、石で捕ったといつて、野鼠と蛇を少しずつ馳走して下さった。

翌日は三菱の人が一人、偶然やって来た。彼は男泣きしながら、田中支店長が自決されたことを話した。

私はその一言を聞いて、自分の目の前が真っ暗になるのを感じた。北上中、偶然お目にかかったあの時の支店長の姿、病気の部下を馬上に乗せ、ご自分はその轡をとって、ただ黙々と歩を運ばれておられた姿は痛々しい限りだった。自決なさった当時の模様を耳にした

がら、自分自身こみ上げる嗚咽をどうすることも出来なかった。もう永遠にあの慈愛深いまなざしに接することは出来ないのだ。

間もなくこの小屋へも日本人会から連絡があった。それは下山に関する連絡だったが、私には五十人一班の班員の名前が記された紙と、班長の心得と依頼状が渡された。

日本人会の指定の日（多分九月八日だったと思う）指定の山道に集まった。人々の中には、すでに老人や子供は見えず、皆やつれ果てた男女入り交じった五十人であった。定刻になってもその集まりはきわめて悪く、何度か迎えに行ってももらった。号令をかけても点呼はとれず、先頭から自分で員数を当たらなければならぬ。それだけ皆の体が弱っているのだ。

私はようやく先頭に立って出来るだけ足をゆるめて歩いたが、いつの間にか前の班の落伍者が私の班に入り交じり、自分の班員を目測することも出来なくなる。そこで班の列尾を確かめに戻ると、別の人が落伍してしまい、列尾の人の顔が変わるありさまだった。班長

は自分の班から落伍者を出さぬようにといわれており、私は人の二倍も三倍も歩き回らねばならなかった。

二晩かかったこの行軍は本当に長く感じられた。

バクダンでは、全員が集まるまで足止めとなった。無事に着いた人たちを解散させる前に、名簿で照合する必要があるからだ。私はようやく先頭に追いつき、自分の前を通過する班員を確認しては、山の斜面に班員たちを露営させた。夜に入ると歩いている人は次第に減り、その顔すらも見えなくなってきた。私も自分の設営をしなければならず、松本さんが設営した場所にとどころ手を加えてねぐらを整えてから、また道に立った。そして落伍者の到着を暗がりの中で待ったが、これ以上の努力は徒労に過ぎぬことを知り、綿のように疲れきった体を横たえた。

翌日、眼を覚ますと、バクダンの様相はまるで一変していた。あたりは全くの焼け野原で、草一本、薪一本すらもなく、湯を沸かす火さえ焚けない。

こんな状態ではすぐ収容されなければ、せつかく苦勞してここまで来ても皆、倒れてしまう。山はまだま

くだりが続くはずだった。だが、道の上の斜面では、皆思い思いにテントを張り、後からたどり着く人たちを待たねばならなかった。疲れきった人たちが斜面に座り込んで下の道を眺めながら後からの到着の者の顔を探す。久しく離れ離れになっていた知人を発見した時は、互いに抱き合い、涙を流してその再会を喜び合っている。

私たちとは違った方面の山へ入った人たちもおおいに集まって来た。初めて米軍からのチリ（豆の一種）の缶詰が一個ずつ配給になった。

私もここで懐かしい北屋敷さんに会うことが出来た。日焼けの顔は栄養失調ではれ上がり、体全体がむくみのためかブヨブヨしていかにも重たげな足取りだった。彼女は「とうとうこんなになっちゃったわ」と悲しげな声でいった。

私は再会の喜びというよりも、彼女のあまりにも変わり果てた姿に驚き、あらゆる場合に率先して自ら苦勞を背負い、自分を酷使される北屋敷さんと、彼女のその献身的な犠牲の陰ではほとんど平常と変わらない

様子の、彼女を取り巻く周囲の人たちとを比較し、私口もきけなくなつた。

そして北屋敷さんから頼まれたような格好だった浜さんをとうとう連れ戻すことのできなかったことを、身を切られる思いで彼女に知らせ、わびたのだった。

聞き慣れない足音が元氣一杯の響きを立て、口笛を吹きながら私たちの目の前を通って行った。初めて見たアメリカ兵だった。

なんとという悔しさ。私は当たりどころもなくその場に棒立ちになって空をにらんだ。その眼からは大粒の涙がポロポロ流れほおを濡らした。不審そうにたずねる松本さんに私は泣きながら「正常な神経を持っていたら、あれを見て泣くのは当たり前よ」とどなってしまった。しかし、あたりにはだれ一人として泣いている人はいなかった。

バクダンに着いてからは、ずっと小雨が降ったり止んだりの日が続いた。時折もらう缶詰も一日一個にも当たらず、せっかくここまで生きながら耐えぬいて来ながら、一人、二人と死んで行く。苦勞に苦勞を重ね、

ようやくここまで連れて来た病氣のご主人をたった今
失い、一人すすり泣く女性の姿は、痛ましく見るに耐
えなかった。

私は松本さんと二人でからになったリュックを背負
い、班員の名簿を持って二キロほど下った谷にある原
住民の小屋の領事館を訪れた。その人たちは豊富な
食糧の中で毎日を送っているのだ。二人は皆の窮状を
訴え、米とコンビーフの大缶二個を強引にもらった。

ウンウンいいながら引き返すと、松本さんと五十分の
一ずつにして道端で班員に配給し、ついでに到着者の
照合も行った。

我が班の員数はぴったり合い、ささやかな配給もと
ても喜ばれ、自分の労が報いられたことに大声を上げ
て飛び上がりたい気持ちだった。だが、私のとった行
為は他の班の人たちにはひどく恨まれる結果となり、
私は少しの間、自分のテントから遠ざかっていなければ
ならなかった。

私も人間だ。小さな体で決して疲労していないわけ
ではない。私の体力も最低線ギリギリの健康状態なの

だ。もしも他の班員のためにもう一缶でも増していた
ならば、二キロの道のりを登りきり無事に配給できた
かどうか、私とて、こんな程度の体力なのだ。それな
のに。たちまち私のうれしさは消し飛んだ。自分のテ
ントに戻る時は情けなさで胸もふさがる思いだった。
麓の米軍キャンプの電気がキラキラ光って、涙の眼に
はまぶしかった。

ようやく八日目に下山の許可がおりた。待ち焦がれ
ていた人たちがわれ先にと山を降りて行った。細い道
の山側には軍刀を外された朝鮮出身の洪閣下（中将、
比島防衛軍兵站監、戦犯で処刑）が部下とともに立ち、
一人一人にねぎらいの言葉をかけ、顔の汚れまで注意
して下さる。閣下は永久に帰らぬ人となった。

街道に出た時は驚いた。道幅は広く、道路の土は新
しい。毎日の雨で土が流され、角のある砂利が素足の
皮を刺激してたまらなく痛む。あれ程厚くなった足の
裏も、水にふやけ小砂利に擦られて血のにじみ出るほ
どの痛さだった。道で拾った布切れを足に巻きつけて
は歩いた。街道の東南は低い森になっており、道は崖

上になっている。道幅の広まった崖際の柵の所で休んだが、私は今まで長い間、私の足となった大切な杖を、心でお礼をいいながら高く、そして出来るだけ遠くに投げた。私以外の何者にも触れさせたくなかったからだ。

夕方近く、人溜まりのしている所に着くとサパーと書いた米軍のレイシヨンの支給を受けた。皆、餓鬼道に落ちた亡者のようにむさぼりついている。アメリカ兵がそれにレンズを向け、シャッターを切っていた。あんな姿で食べているところを写されては本当に情けないと思いつながら、私もそれに手をつけずにはいられなかった。意識して慌てないように上品ぶってゆっくり食べながら、久しぶりに人間の食物を味わい、食後の煙草からティッシュペーパーまで行き届いている米軍の携行食糧に驚き、しかも、その驚きを内心に隠して冷静さを装いながら、食べたのだった。

私たちを収容所へ運ぶ米軍のトラックが、闇を引き裂いてやって来た。ヘッドライトとエンジンの響きが私を異常な興奮に誘い、乗車してからも、しばらくは

心臓の鼓動が高鳴っていた。

トラックは夜道を休まず疾駆した。途中、男女に分けられ、何回か乗り継がされた。真夜中の乗り継ぎでは、通訳が井上夫妻であることが声の様子で分かった。思わず懐かしさに声をかけたが、騒然とした中で私の声はかき消され、とうとうその場はお会いすることは出来なかった。

車の中で朝を迎えた。人家のある所をトラックが通ると、私たちは罵声を浴びせられ、小高い家の庭先で洗濯をしていたおかみさんは、やにわにタライの中の石鹼水を浴びせかけた。

金網で囲まれたテント張りの中に私たちは降ろされた。そこはソラノカボンファルのようだった。遠い金網の外側には比島の人々がたかり、拳を振り上げたり、唾を吐いたり、憎しみを私たちに精一杯ぶつけていた。私たちはここで一泊、そして翌日、バナナ一房が私の名あてでだからとなく届けられた。間違いなく私の名前である。あたりを見ると、遠い金網の外側で顔にハンカチを当てながらしきりと手を振っている二人

の女性がいた。私が手を振ると、それに応えるように彼女たちは伸び上がってますますちぎれるように手を振り返している。それにしても、その金網まで届かぬ私の視力が、残念でならなかった。しかし、私にはバナナの贈り主が、そしてあの金網の女たちが、ルシアとフアノのように思えてならなかった。

私たちに対する米軍の扱いは、思ったより親切であった。ここで一泊したのも下山した邦人たちの体力が、長途の輸送に耐えられないと判断したからだったとか。所持品検査も検査そのものは厳重を極めたが、ある種の節度は失っていなかった。

私の隣で検査を受けた女性が、夫の遺骨の白布を解きかねて困っていた時のことである。私はそばから「これは彼女のご主人の遺骨です」と説明した。検査の米兵は、「それは知らなかった。お気の毒に。大切に上げてあげるようにしてください」と言いながら、彼女に哀れみのまなざしを向けていた。他の兵隊も私の家が東京にあることを知り、「私はあなたの家族が健在であることを祈っている」といってくれた。

また、私の首の金のネックレスに眼をつけたひょうきんな兵隊は、自分の腰のビストルと交換しようとか、すばらしい夢見るようなキッスをして上げるからくれないかと持ちかけ、おどけたかわい執心にとりとり根負けした私は、一包みのサンドイッチとネックレスを金網越しに交換しなければならなかった。

私たちはこうした米兵との触れ合いで、これまでの憎しみを少しずつほぐしながら、再びトラックや汽車で南下、モンテンルパ近くの広大なテント村に収容された。

そこは高い高い金網が二重に巡らしてあり、網と網との二メートルぐらいの間には鉄条網が螺旋状に横たえられていた。食任にありついた我々の逃亡などあり得ようもなく、それほどの厳重さは、反日感情の強いフィリッピン人からの迫害を恐れての処置らしかった。真新しいテントの中ではキャンパスベッドが頭をつき合わせて二列並べであり、その真ん中が通路になっていた。そんなテントが整然と幾つも張っており、門の横には事務所のテント、その脇には必需品の倉庫の

テント、門からの真正面の奥は、ちょうど収容所の南北の中央に当たり、そこが炊事場になっていた。

私たちは初めてその門を入った時には、頭といわず体といわず衣類まですっかりDDTの白粉をかけられ、ただでさえみっともない我々は、白髪頭とムラについた白粉の顔で見るもあわれなこっけいな姿になっていた。そして溝掘りやテントの杭を打ちついたりして働いている人は、全裸にカーキ色の米軍のタオルを巻きつけた日本の兵隊さんたちであった。

ところが、キャンバス・ベッドに寝そべりながら我々の格好を嘲笑し、日本兵の労働を眺めている人たちもいた。その人たちは、山の苦勞を味わう前に投降して捕虜になり、全員に渡るはずの石鹼や歯ブラシやPW(捕虜)の衣類やらを十二分に受けた、ぜいたくな生活を続けていた利口な人たちだった。私たちはそういう利口な人たちのおかげで着替えすらもなかったが、それでも毛布や食器が貸し渡され、食住には心配なく、何の使役もなく、シャワーも浴びられる、もったいないような生活が始まった。

一番端のベッドが私で、隣は北屋敷さんと行動を共にした石田さん、そしてその隣には二世で英語の達人な梶田さんという九州の方がいた。北屋敷さんと、山中で残り少ない缶詰の一つを開けてご馳走してくれた石産精工の山越さんは重体のまま病棟に収容されていた。

間もなく二世の梶田さんは事務所勤務になり、梶田さんの紹介で私も度々事務所のお手伝いを始めた。久しぶりに鉛筆と紙を持った時の恐ろしさ。震える手で住所氏名を書いてみた。私は書くことを忘れていなかった。それからの私は、時にふれ折にふれ鉛筆を握り、何かしらつづるようになった。何でもよい。書く喜びを存分に味わいたかったのだ。医務室の米人の軍医少佐は、私のそれを見て、インクとペンのセットを下さった。二世の梶田さんが私の詩を原作以上に上手に、彼に訳したためらしかった。

手伝いのない日は、朝から晩まで全く暇だった。

装具と共に着替えを全部失った私の下着の洗濯は傑作だった。着のみ着のままなので、まず、アンダー

シャツを脱いで両肩のところを柔らかく結び、シャツの手を入れるところに足を入れ、胴は紐で結んでおく。そしてブルマーを洗い、乾くとブルマーをはいでシャツを洗い、シャツが乾くとブラウスを洗うという風だった。そして浴場でズボンを洗ってしまった時などは、濡れたままのそのズボンをはいでテントに戻り、毛布を腰に巻きつけてからズボンを干しに出て、乾くまでは寝転んでいなければならなかった。皆の洗濯もよく引き受けた。

収容所は週に一回、三十分間、外部からの面会が許された。そんな時は門の脇の金網越しに、さまざまな面会の光景が見られた。比島人の奥さんであった人は、夫と子供と姑と涙の対面をしていた。また一般邦人の男子の収容所から訪れて来る人は護衛つきで、妻子や同じ会社の女の人たちの安否を気遣っていた。

病棟に入るほどではないが、ちょっと弱っているとされる人には、午前十時と午後三時にミルクが与えられていたが、私の体も医務室で問題になった。主な食物が野草であったにもかかわらず、相当の体力を

持っていたためで、私が一日に食べていた野草の分量を説明しても、信じられない様子だった。さらに私の説明を細かく聞くためか二世の通訳を呼んで、うなずいたり、感嘆の声をあげたりしながら口述筆記し、「アメリカの婦人だったら、おそらく全部死んでしまったでしょう」といって固い握手をした。

回覧の戦争の情報は日本語で書いてあったが、見出し程度の簡単なものでたいして気にもならなかった。しかし、掲示板の英字新聞は意外なことばかり多く、首をひねっては小野五枝さんと話し合ったが、状況が次第にわかって来ると、急に東京の安否が気遣われ、たまらない郷愁にもだえ苦しむのだった。

梶田さんと一緒に事務所にいる時、将校が微笑みながら、「今、あなた方の一番望んでいるものは」と聞かれると、私は即座に「内地に帰ることです」と答えてしまった。一瞬、将校の顔が変わったように思えたが、何かもつと簡単な希望を聞かれたものらしかった。

間もなく日本病院や、日赤の看護婦たちがトラックで門を出て行った。私はうらやましく手を振って見

送ったが、その後すぐ、梶田さんと私はこの将校に呼ばれ、看護婦たちは内地へ帰されるのではなく、米軍の病院へ勤務するために出発したのだと聞かされた。

そして内地帰還の受付が開始されたら、(三〇一と三〇二)をお取りなさい、と教えてくれた。

私たちはいわれる通りすると、その番号は必ず真先に呼ばれ、とうとう待ちに待った帰還の日がやって来た。弁当箱と毛布二枚は返却し、水筒一個がそれぞれに与えられた。私は病棟に飛んで行き、北屋敷さんと山さんに知らせた。病人の気持ちを思い、黙ってお別れしようかと考えたが、やはりそんなことは出来なかった。むごいようだが、それが最後になるかも知れないあいさつはしなければ、気持ちが済まなかった。

山さんはやせこけ、声も小さく元気は全くなかった。結石が出来ているとのことだった。北屋敷さんはますます顔の色が悪くなっていた。私のあいさつにポツと頬を染められ、私たちの帰国を心から喜んで下さったが、その陰の寂しさは隠しようもなかった。それでも「私たちもすぐ後から帰るから、先に帰って待ってて

ね」という。私の胸には熱いものがこみ上げて、ここで泣いてはと思いつつも、言葉はどもりがちだった。病棟の外に出るとこらえていた涙がせきを切ったように流れた。

トラックに乗り込むと、エンジンの響きが今までのすべてを忘れさせた。次第に喜びがわき、トラックが走り出すとともに胸の高鳴りはますます激しくなっていた。波止場に着いたのはもう夕暮れ近かった。棧橋に横づけされた軍艦に懐かしい日の丸をみた時は、一人残らず感激の涙にむせていた。

乗艦完了、棧橋を離れた船は少し位置を変え、停止した。マニラの街が海から一望に眺められ、アドミラルホテルもアンヘラも健在で、遠くからでは街の変化はわからなかった。ただマニラ湾内の沈没船は、あの艦隊がやられた時より一層その数を増していた。

夕食は、温かい心尽くしの赤飯に尾頭付き、それに味噌汁、梅干という日本食。その上、食後には甘いおしるこ、まだ青みがあったミカンがついていた。

甲板に出ると、ポチポチとマニラの灯がまたたき始

めた。船はまた少し位置を変えた。私はたまたまなくマニラとの別離が辛くなり出した。山に眠った多くの友人たち。収容所に残した仲良しの友達。そしてフィリッピンの人々。夜空に星を仰ぎ、尽きせぬ思い出の数々をたどっているうちに、マニラ最後の夜は更けていった。

翌朝、狭い船倉から皆一斉に抜け出したのは、これまで継続していたエンジンが快調な響きを続け出したからだ。私たちの船を先頭に、後から二隻の同型の船が続いている。皆一斉に歌い出した。

「さらばマニラよ、また来るまでは、しばし別れの……」

帰国はうれしさに違いない。しかし、皆の顔は喜びというには、余りに複雑な表情だった。眼をつぶって歌っている者、見送る者もない陸に向かっていつまでも手を振っている者。船は湾口に近づいて行った。来る時は緑であったコレヒドールの要塞は、尖端から、燃え跡の黒一色になっていた。残酷な黒い塊の島、私はそれに黙禱を捧げた。

既にマニラも、島も、半島も、ただ一つの紫の鳥影になり、遙か彼方に横たわっていた。

【執筆者の横顔】

岡田梅子さんは二十五歳のとき、三菱商事本社からマニラ支店転勤を命ぜられた。

昭和十八年の八月だったので、大東亜戦争は次第に苛烈をきわめている時であり、危険を感じていたが、子供時分から未知の外国にあこがれていたので、何のいこうもなくむしろ喜んでマニラに赴任したオテンバ娘である。

翌、十九年に入るや、マニラにいた日本人は、郊外に疎開し、岡田梅子さんも、これに参加した。農地を借りて日本村をつくり自給の方針だった。

しかし、翌、二十年二月には、日本村は米軍の占領となり、やがて海、空、陸の三方からなる爆撃で日本軍の敗走や必死の抵抗から惨憺たる戦死者山野に散乱し、言語に絶する様相を呈した。

岡田梅子さんたちのだれも食べもののない生活は正

に飢餓、地獄化したものであった。こうした民間の日本人に更に危害を加えようとする米軍ではなかった。

むしろ、タバコやチューインガムを与える米軍もいた。

日本が敗戦したので強烈な怒りがおこらない、米軍の爆撃に対する憎しみが少しずつはぐれていくのを感じた。

戦局はげしい最中であっても、沈着にして理性を失わず、判断して行動できる、岡田梅子さんであった。

現に、鉛筆と用紙があれば、無限の自由天地にあまがけて楽しみを、文につづって老齢をみせない更なる新芽を生えさせている。

(出引揚者団体全国連合会)

副理事長 結城 吉之助)

生きる

熊本県 新美 彰

あの忌まわしい戦が終わって、もう一か月以上も

たっているだろうか、マニラにある捕虜収容所に送られる途中、堀割のある町を通った、水の豊富な堀割にかかった石橋の上で、長い黒髪を洗っている若い女が、こちらをジロリと眺めた目、それに金か、それとも真鍮かわからないが、大きなイヤリングが夕日にキラリと光った、その目もイヤリングも憎しみに燃え蔑んだ目だった。

お尻を持ち上げて、ソラノ、ボンハル、バヨンボンの町々を眺めたいと思ったが、あの彼女の目の一撃で腰をおとし、座り込んで小さくなった、彼女ら、原住民の方々の気持ちを思うと、さぞかし憎い日本人たちであろう。

憲兵隊の宿舎になっていた、バヨンボンのRamon B Balidoさんの家の何かを私はあの時盗んだ。それで憲兵隊の方々が困っておられると聞いて、ごめんなさい、とバルドウさんに謝りに行ったら、かえって子供を抱えて大変だろう、と御自分たちが食べておられた夕食を分けて下さった。私は床に上って、フィリップン式に指で口にはじき込む食事の仕方をしたので、御主人